
リンの手紙

花木静

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンの手紙

【Nコード】

N8750Q

【作者名】

花木静

【あらすじ】

今日はパイとシムリのデートの日。しかし、突然かやねずみの子供のリンがやって来て、パイの家に住むのだと言い出す。パイとシムリは困ってしまっ……。ねずみたちのほのぼの恋愛小説。『はつかねずみの小説家』シリーズ第二弾です。この作品は魔法のiらんどとの重複投稿になります。

「まあ、またなの？」

ピイは新聞を読んで、ため息をついた。子供の神隠し事件が頻発しているというニュースを見つけたのだ。夏のこの時期になると、何故か起きるのだ。

「怖いわ」

ピイは新聞を机の上に置いた。

今日はシムリとのデートの日。はつかねずみの小説家であるピイは、執筆中の小説をきりのいいところまで仕上げ、出かける準備を始めていた。

まず、仕事着である茶色い無地のワンピースを脱いで、真新しい、白地に青い水玉模様のさわやかなワンピースに着替える。耳には貝殻の耳飾り。首には真珠の首飾り。靴は真っ青なサンダル。女性たちに流行っているひげの化粧は、水色だ。筆で一本一本丁寧に塗って、手ではたぱたとあおいで乾かす。鏡台の前に座ってするその作業に、ピイはもう慣れた。もう自分におめかしは似合わないなどと自信のないことは言わない。

鏡に向かって、笑顔の練習。一人でいるときはにっこりと完璧に笑えるのに、シムリの前だと照れて、うまく笑えない。大声も出せない。ピイは大人しい少女なのだ。

もうすぐ大人になるのに。

ピイはそんな自分に少し呆れている。

シムリが迎えに来る前にと、ピイは掃除を始めた。以前シムリがピイのために作ってくれた、れんげの模様の入った机を特に入念に原稿と新聞を片付けて、ふきんでよく拭いて。机の横の大きな本棚もはたきではたく。鏡台の上を片付けて、鏡を拭く。床をモップで

よく磨いたら、シンプルな部屋はすっかりきれいになった。
よし、完璧。

それでもまだシムリが来る時間にはならない。少し張り切って早起きすぎたかしら、と思う。シムリとのデートの日は、いつもこうなる。

だって、楽しみで仕方がないから。

ベッドに座って目を細め、くすくす笑う。嬉しくてたまらない。シムリと会うのはいつもこんな気分になる。

そのとき、玄関の呼び鈴が鳴った。パイははっとして立ち上がる。ときどきしながら、玄関のドアを開く。誰もいない。

変なの。

そう思って、ドアを閉じようとした。すると、下のほうから甲高い声が聞こえてきた。

「何でドアを閉じるんだよ、パイ」

「え？」

見下ろすと、小さな小さなかやねずみの子供が立って、パイを見上げていた。口を尖らせて、文句を言う。

「ぼくが来たんだから入れてよ。何だよ、せっかく来たのに」

「あの」

パイは戸惑いながら子供に聞く。

「あなたは、どこの子？」

途端に子供はかんしゃくを起こして、

「パイの馬鹿！」

と怒鳴った。

「ぼくはロンとランの息子、リン。知らないなんてひどいや」

「ごめんなさい」

パイはしゃがんでリンを見た。枯れ草色の、小さな男の子。

「編み靴職人のロンさんの息子さんね。かやねずみさんたちの街はよく通るけど、あそこはひとが多くて混乱するの。あなたくらいの小さな子もたくさんいるしね」

「ぼくは小さくない！」

リンがまたかんしゃくを起こした。

「かやねずみが皆小さいと思って馬鹿にしてるだろう。ぼくは同い年のかやねずみの子供の中で一番背が高いんだぞ！ そのうちパイのことも追い越してやるんだから」

「そうね。ごめんなさい」

慌ててそう答えたあと、パイは首をかしげる。

「そういえば、あなた、どうして家に来たの？」

すると、リンはむっつりと黙り込んでしまった。パイは困り果てて、リンを招き入れる。

「とにかく、中に入りなさい。外は暑いわ」

外はもうれんげの季節を通り越して、様々な青い草で生い茂っている。リンも、汗で毛を湿らせていた。

仕事部屋でもあり寝室でもあり居間でもあるパイの部屋の桜材のテーブルに、冷たいハーブティーを二人分置く。リンは高さの足りない椅子に座って、まるでつかねずみの赤ん坊のようにカップを両手に持つてごくごくと飲む。かわいいな、とパイは微笑む。

リンは辺りを見回した。

「ここがパイの仕事部屋？」

「そうよ」

「ふうん」

また勢いよくお茶を飲む。目はきよろきよろとあちこちを見ている。

「パイってもつと立派な家に住んでると思ってた」

リンが意外そうに言うので、パイは笑った。

「どうして？」

「だって、小説家じゃないか」

「小説家は立派な家に住むものなの？」

「そうだよ。有名な作家は大きなプールつきの家に住んでるんだよ」
パイはくすくす笑う。

「わたしはあんまり有名じゃないもの。それに、この家が気に入ってるの」

「ふうん」

お茶は空になってしまった。パイは新しく注いでやりながら話しかける。

「お父さんとお母さんは？ 今何してるの？」

するとリンはじろりとパイをにらんだ。

「パパとママの話はしたくないな」

「どうして？」

「だって、ぼく、家出てきたんだもの」

「えっ」

パイが目丸くする。リンは話を続ける。

「パパもママも、赤ん坊に夢中なんだ。ぼくのことなんか気にかけてもない。だから家出したんだ。これからはパイの家に住むんだ」

「リン、それはできないわ。今からお父さんたちに会いに行きましよう。わたし、話してあげるから」

「やだよ」

リンは椅子を飛び降りて、パイの本棚に駆け寄った。下のほうにあるパイの書いた本を開いて、座って読み始める。パイは困り果てていた。一体、どうすればいいのだろう。

考え込んでいると、呼び鈴が鳴った。パイがはっとして歩き出したが、リンも本を置いて立ち上がる。

「ぼく、出るよ。これからはここの住人だもの」

駆け寄って、うんと背を伸ばして、ドアノブを回す。そこには黒ねずみのシムリが立っていた。まじまじと、リンを見つめている。

「リン？」

「シムリ！」

リンはシムリに飛びついた。シムリはにっこり笑ってリンを抱き上げると、パイの元に歩いてきた。パイは少し困った顔だ。

「どうしてリンが？」

「家出してきたらしいの」

「ぼく、ここに住むんだ」

リンが元氣よく言うと、シムリも驚いた顔をした。

「そうなの？」

「そうだよ！」

パイが答える前にリンが口を挟む。シムリはちょっと考える顔をして、すぐに事情がわかったらしく、パイにウインクをした。

「仕方ない。リン、ぼくのパイなんだから迷惑かけるんじゃないよ」

「パイはシムリのものなの？」

リンが無邪気に訊くので、パイは顔を熱くした。答えないパイを見て、リンは、

「ふうん」

と口を尖らせる。

「でもこれからはぼくのパイだよ。シムリは遊びに来るだけで、ぼくはパイと住むんだから」

「ははは、とシムリが笑う。」

「取られちゃったわけか。わかった。でも大事にするんだよ」
「うん」

リンはうなずいて、シムリの腕から降りて、また本を読み始めた。シムリがテーブルについて、パイにひそひそと内緒話をする。

「君はリンの相手をしていて。ぼくはロンとランを呼んでくる。君のこと、ずいぶん気に入ってるみたいだから逃げ出したりはしないよ」

しかし、パイは少し自信がなかった。パイは子供の相手をすることに慣れていないのだ。

「シムリ、シムリが家にいて。わたし、ロンさんたちを呼んでくるから」

「そう？」

シムリは首をかしげると、うなずいて、
「わかった」

と言った。

「行っておいで。きつとロンたちも探してるよ」

2

パイは赤い屋根の家を出ると、青々とした草の森を少し早足で歩いた。森にはちゃんとねずみ用の細い道があつて、石畳が敷いてある。

シムリは子供あしらいが上手いのね。それどころか、どんな人にもすぐになつこり笑いかけられる。

パイは歩きながら考え事をしていた。

それに比べてわたしは駄目。リンが少し無茶を言うだけでおろしてしまふし、人見知りをするわ。

ため息。

わたし、早くちゃんとした大人になりたいわ。だからこの事態もちゃんと決着をつけなきゃ。

どこを行っても背の高い草ばかり。春と違って風景が全く変わらないので、かやねずみの街が遠く感じられる。サンダルがかつかつ鳴る音、虫の鳴き声。昼なので、暑さがひどい。

ようやく道に沿って家々が立ち並ぶ街に着き、パイはほっとした大きなバツタやカマキリに会ったりしたりしたらどうしようかと不安だったのだ。しかし暑さのためか、街には人気がなく、パイは一人ぼっちのような気がする。

「あれ？パイちゃん？」

喫茶店の窓から店主が覗いて、声をかけてきた。茶色くて大きなねずみだ。

「どうしたの？今日はシムリとデートなんじゃなかったの？」

「どうしてそれを？」

パイはびっくりして思わずそう訊いてしまった。店主は白いエプロンで手を拭きながら外に出てくる。

「シムリが自慢してたからさ。ずいぶん楽しみにしてたんだよ」
「そうなんですか」

パイは嬉しくなる。しかし、リンのことを思い出してまた使命感に追われる気分になる。

「実はかやねずみのリンが家出したらいいんです。リンはうちにいるんですけど、わたしたち、それどころじゃなくなって」

「そりゃあ災難だねえ」

店主は気の毒そうな顔をする。パイは首を振る。

「そんなことありません。わたし、早くロンさんたちにリンのことを教えなきゃ」

「そうかい。終わったらデートしてあげるんだよ」

「ええ」

パイは上の空で笑って歩いていった。店主がしばらくパイの背中を見ている気配がしたが、パイはそれどころではない。早く行かなければ。

通りが終わると、やっとかやねずみの街にたどり着いた。パイの通ってきたところよりもよほど背の高い草の途中に、わらや布やりボンや、様々なもので編んだ家が絡み付いている。かやねずみたちは伝統的な暮らしを捨てず、このような昔ながらの家に住んでいるのだ。

その中から、ロンの家を見つけ出す。純粹にわらと草の葉でできた素朴な家だ。パイは下から声をかけた。

「ロンさん、ランさん、いらっしやいますか？」

どこからかひとの気配がするのだが、パイの声が小さいのか届かない。

「ロンさん」

一際大きな声を出す。すると隣の家からかやねずみの一人が顔を出した。

「おや、パイちゃん。何してるの？」

知っている顔だ。パイは手を目の上にかざして日よけにして、大

声で答えた。

「ロンさんたちに会いたくて」

「ロンたちなら子供を探しに行つたよ。リンが家出したんだってさ。かやねずみたちが総出で探してるんだけど、見つからないんで困ってるんだよ。おれはリンが帰ってこないか番をしてるんだ」

ピイはほつとしてこわばった声がほぐれてきた。

「リンはうちにいますよ」

「何だつて？」

「何故だかわからないんですけど、うちに住むって言い出したんです。ロンさんや他のかやねずみさんたちに教えてあげてください。そして、リンを迎えに行つてあげるように伝えてください」

「ふうん。リンがねえ」

かやねずみはぼりぼりと頬を掻いた。それからちよつと笑つて、

「あいつ、ピイさんが大好きだからねえ」

と言つた。

「わたしを？」

「あんまり言つたらリンに叱られるから黙つとくよ。わかつた。ロ
ンたちに伝えておくから」

「ありがとうございます」

ピイは首をかしげながらそう声を上げて、道に戻つていった。ピイは役目を果たせたことと、大きな声を思い切つて出せたことに満足していた。

草むらの街に入る。歩いていると、早速喫茶店の店主が顔を出した。

「子供の親は見つかった？」

「いいえ。でも他のひとに伝言を託したから、すぐに迎えに来てくれるはずですよ」

「迎えに来るまでどうするの？」

店主が目を丸くするので、ピイも同じ顔になる。

「うちで預かります。シムリと二人でお世話をするから大丈夫です」

よ

「そう?」

店主は口を尖らせて、パイを見た。パイはそれを不思議に思いながら挨拶をして、また長い道のりを帰っていった。

「おかえり、パイ」

赤いドアを開けて、最初にパイを抱きしめたのは、リンだった。シムリはにこにこそれを見守っている。

「どこに行ってたの? ぼくシムリと二人で退屈してたんだよ」

「ひどいなあ」

シムリが笑う。

「一緒に遊んだじゃないか。トランプで塔を作ったり、パイの本を読んだりさ」

「シムリじゃやだ。パイがいいんだ」

パイは優しく笑って、リンの頭をなでる。

「ごめんね。うちは遊ぶものがないものね」

「そうじゃない。パイのうちにわざわざ来たんだよ。パイと遊びたいに決まってるじゃないか」

リンがむっとした顔になる。パイは困ったように首をかしげた。

「じゃあ、わたしと何かする?」

「うん」

「何がいい?」

「何でもいい」

その答えにパイは悩みこんで、シムリを見た。シムリは機嫌よく笑っていて、

「君が子供のころやっていた遊びをすればいいじゃないか」

と言う。そこでパイは思い出した。しゃがんでリンに語りかける。

「わたしが子供のころはね、一人遊びが多くて、いつもお手紙を書いていたの」

「誰に?」

リンが不思議そうな顔をする。

「想像上の人に。あるいは両親に。普段恥ずかしくて言えないようなことを、出さない手紙に書くのよ」

「面白い？」

「わたしは面白かったけど」

パイは自信なさげに笑う。しかし、リンは、

「やる」

と真面目な顔で甲高い声を上げた。

様々な色の封筒と便箋を、パイは書き物机から取り出した。シムリが興味津々にその様子を見る。

テーブルは背が高すぎるので、リンのために床に小さな新しい絨毯を敷く。夏らしい青い絨毯の上に、すぐにリンは飛び乗り、パイが差し出した便箋と万年筆を受け取ると、何かをかりかりと書き始めた。その間、パイとシムリはテーブルに向かい合っについて、お茶を飲むことにする。

「ロンたちはどうだった？」

シムリがひそひそと聞く。

「リンを探しに出ているらしいの。伝言したからすぐに迎えに来てくれるわ」

パイも同じように答える。

「そうか。よかった」

「ロンたちが気の毒なものね」

「それもあるけどさ、ぼくとしては」

「パイ！ できたよ」

シムリの言葉はリンがかき消してしまった。パイは立ち上がり、リンのところに手紙を見に行く。

「『遠くの街のチーズ・レストランのオーナーさんへ。ぼくに立派な穴あきチーズをください』ですって？ 遠くの街のチーズ・レストランって、何ていう店なの？」

「『ボン・シエール』ってレストランだよ。ぼく、そのチーズを

ひとかけ食べたことがあるんだ。すごくおいしいんだよ」

「リンは物知りね」

「いつかね、パイをその店に連れて行ってあげる。きっと満足するからさ」

「ありがとう」

パイはリンを抱いてひざに乗せた。リンはパイの胸に抱きついて、

「パイ、いい匂いがする。ぼく、だーい好きだよ」

「本当？ 嬉しいわ」

「一緒に住んだらね、ぼく何でもする。料理も洗濯もするよ」

パイは困り顔でシムリに微笑みかけた。すると驚いたことに、シムリが真顔で、

「リン、それはできないよ。リンは家に帰るんだから」

と言い放った。パイが驚いていると、リンがパイにますます抱きついてきた。

「そんなこと言っても、ぼくはここにいるもんね」

「パイはさつき、君の両親を呼びに行ったんだよ」

リンが顔を上げてパイを見る。信じられないものを見るような目。パイはいたたまれなくて顔をそらした。

「パイ、嘘だよね」

リンがさがるようにパイを見る。パイは、どうしてシムリはこんなことを言い出したのだろう、と泣きたくなる。いつものシムリならこんなことを言わないのに。

「嘘だよね」

そのとき、玄関の呼び鈴がちりちりと鳴った。

3

「ぼくが出てくる」

相変わらず真面目な顔をしたまま、シムリは椅子から降りて玄関に向かった。ドアが開き、小柄な枯れ草色のかやねずみ夫婦がすぐ

に飛び込んできた。ロンとランだ。ロンが赤ん坊を抱いている。

「リン！」

ランが駆け寄ってきて、パイのひざから降りたリンを抱きしめる。パイはほっとしたのと後ろめたいのogaないまぜになった気分ですれを見ていた。リンはしょんぼりしている。

「パイちゃん、ありがとうね。リンのこと世話してくれて」

「本当に」

ロンがパイの手を握って何度も振る。ランがリンに説教をする。

「パイちゃんにご迷惑をかけて。謝りなさい」

リンは床を見てだらりと立ったままだ。パイは、いいんです、と言いかけた。そのときだ。

「パイの馬鹿！ シムリの馬鹿！ パパとママの馬鹿！ ぼく、皆大っ嫌いだ！」

そう叫んだかと思うと、リンは風のように駆け出して、玄関のドアから出て行ってしまった。

「リン！」

ランが叫び、飛び出す。それに付いていくロン。パイも玄関を出て、辺りを見回した。石畳の道は長く続いているはずなのに、ロンとランが立ち尽くしているばかりで何も見えない。おそらく草むらに入ってしまったのだろう。

シムリが出てきて、パイの横に立った。唇を噛んでいる。

「ぼくのせいだ」

「そうよ」

パイはシムリをにらみつけた。

「どうしてあんなことを言ったの？ リンが傷つくのは目に見えてるじゃない」

シムリがうなだれてパイを見る。

「ぼくは早くリンに帰ってほしいなって思って」

「どうして？ リンの世話をするのが嫌だったの？」

「どうしてって」

シムリはそのまま黙り込んだ。それを見て、パイは思わずこつ怒鳴ってしまった。

「シムリはわがままよ。自分勝手よ」

シムリが困った顔をする。

「自分勝手かもしれないけど」

「けど、何よ」

「いや、言わない。とにかく、リンを探そう。ロンたちはもういなくなってる」

パイははっとして家の前を見た。もう、人気がない。

「別れて探しましょ。わたし、シムリと一緒に嫌」

そうつぶやいて草むらに入り込む。シムリはため息をついて、反対側の草むらに入った。

歩いていると、背の低い草がサンダルに引っかかる。はき替えればよかったと思いつながら道なき道に行く。がさがさと、何かの気配虫だろうか。ぞつとする。それに、ひどく暑い。ときどきめまいがする。

しばらくして、音楽がかすかに聞こえてきた。トランペットの音。陽気な曲だ。パイは、何だろう、と思いつながら歩いていく。

突然、草むらを出た。目の前には、草の生えていない広場があった。そこにあつたもの。それはとても奇妙なものだった。

様々な派手な色で彩られた縦じまの大きなテント。入り口で、同じ模様の服を着たはつかねずみがへんてこな踊りを踊っている。両目の周りをピンク色の染料でハート型に染め、ひげは虹色に塗っている。この怪しいねずみは、トランペットを吹いて、誰かに誘いかけていた。パイに？ いや、リンだ。

リンは、ふらふらとテントに近づこうとしていた。近づくほどに、怪しげなねずみは踊りを激しくする。まるでとても嬉しいかのよう

に。
テントの中が見える。真っ暗だ。パイにはそれが口に見える。大

きな化け物の口。

リンがねずみに近づく。ねずみは踊りながら、トランペットを高く鳴らす。にやりにやりと笑っている。テントの中から、不穏な空気が漂ってくる。

リン、行っちゃ駄目。

パイは、自分が叫んだような気がした。リンが振り向いて、パイと声を出している。

途端に、テントとねずみは、すっと消えた。

「パイ、大丈夫？」

パイが目覚めると、そこはパイの家だった。シムリが上から覗き込んでいる。柔らかい。ベッドの上らしい。額が冷たい。触れると濡れた手ぬぐいが載っていた。

「シムリ？」

「ああ、よかった」

シムリが大きくため息をつく。

「君、草むらで倒れてたんだよ。医者に見てもらったけど、軽い熱中症だったさ。今日は外に出ずっぱりだったからね」

「わたし、気絶してたの？」

「うん。ごめんね。ロンたちのところには、やっぱりぼくが行くべきだった」

シムリの心配そうな顔を見てほっとしたけれど、ロン、と聞いてさっきの出来事を思い出してしまった。だるい体を起こそうとして、駄目だよ、とシムリにとめられる。

「リンは？」

「リン？ ランが見つけて、家に帰って行ったよ」

「本当に？」

だって、と言いかけて黙った。陽気な音楽、派手なテント、奇妙なはつかねずみ。パイはぞっとして身を震わせた。

「どうしたの？」

シムリが心配そうにパイの顔を見る。パイは強い口調でシムリに訊く。

「本当に、リンは帰ったのね？」

「本当だよ。冗談だったら大変だ」

シムリが少し笑う。それを見て、パイもまた笑った。

「よかった」

力が抜ける。きっと、あれは夢だったのだ。

「ねえ、パイ。リンが帰ったから、リンの『出さない手紙』、片付けたんだ。そしたら色々見つかったよ。読んでみる？」

シムリが封筒の束を取り出して、にっこりと笑った。

4

『パパとママへ。大好きです。でも、最近ほんと全然遊んでくれないよね。赤ちゃんはぼくの大事な弟だってわかってはいるけど、寂しいです。だから、もっとぼくに大好きだって言ってほしい。抱きしめてほしい。それだけが今の願い』

この手紙を、パイとシムリはこっそりと、ロンとランに見せた。

二人は、後悔したかのようにため息をついてそれを読んだ。

「こんなことを思ってたのね。かわいそうなことをしたわ」

ランが赤ん坊を抱いたままつぶやいた。

「この子が生まれて忙しかったからなあ。これからはもっと遊んでやらなけりゃあ」

ロンは腕を組んで、離れたところで草の茎を上り下りして友達と遊ぶリンを眺めた。

「手紙は絶対にリンに見せないで。またリンに嫌われちゃう」

シムリが言うと、二人はこっそり声を出して笑った。

「大事に取っておくよ。これはおれたち夫婦の宝物だ」

と、ロン。

「パイちゃん、こんなもの書かせてくれて、ありがとうね」

と、ラン。

パイとシムリは笑って顔を見合わせた。

草むらの街を歩いてみると、喫茶店の店主が窓から顔を出した。

「デート？」

「いきなり、それ？」

シムリが声を出して笑う。パイは恥ずかしさでうつむいている。

「いやさ、この間さ」

「いいんだよ。今日はデートできてるんだから」

店主はほっとしたように笑う。

「ならよかった」

「リンのお陰なんだ。この間のかやねずみの子」

「何で？」

店主は不思議そうな顔をする。

「手紙をもらったんだよ」

「手紙？」

『パイとシムリへ。シムリ、やきもちをやかせてごめんね。ぼくはパイにべたべたしすぎたかもしれない。早く帰らないかなって思ってただろう？ ぼくはパイのうちに住むけど、それはパイがぼくの尊敬する小説家だからなんだ。ぼくは将来小説家になりたいくて、弟子入りしに来たんだよ。シムリがゲイルさんに弟子入りしてるみたいだね。ぼくは手紙が上手だろう？ 文章を書くのは得意なんだ。というわけで、心配しないでほしい。ぼくはシムリからパイを取ったりしないよ。パイへ。ぼくはパイが大好きだよ。いい匂いがして優しくて、素敵な小説を書いて。尊敬しています。これからしばらく住むことになるけど、そのときは厳しく指導してほしいな。ぼくはパイみたいな立派な小説家になるんだから』

「全く、これにはやられたね」

シムリが笑う。ここはパイの家だ。二人は冷たいお茶を飲んでい

る。

「わたしも驚いたわ。シムリ、やきもちをやいてたの？」

パイが上目遣いにシムリを見る。シムリが頭をがりがり掻く。

「だってあいつ、あんまり図々しいから。ぼくのパイだって念を押してるのに、パイのことを大好きだって言ったり、抱きついたり。デートだっておじゃんだしさ」

パイは顔を熱くして、嬉しいけれど恥ずかしい、複雑な気持ちになる。

「でもリンは子供よ。大人気ないわよ、シムリ」

「大人気なくたっていいさ。ぼくは君が大好きなんだから」

また、あっけらかんとこんなことを口にする。パイは思わず顔をほころばせてしまう。そのとき、シムリが思い出したようにこんなことを言った。

「でも君、この間はぼくに怒鳴ったね」

「ごめんなさい。言い過ぎたわ」

パイは申し訳なくなつてすぐに謝った。シムリが首を振る。

「いや、嬉しくてさ」

「嬉しい？」

「君がぼくに感情をむき出しにしてぶつかってくれた。それってすごく嬉しいよ」

「そんなことが？」

「それに、君はすごく責任感が強い。驚いたよ。君って、ぼくよりよっぽど大人だ」

「そんなこと、ないわ」

パイは照れ笑いをした。シムリはにっこりと笑う。そしてこんなことを言う。

「大好きだよ、パイ」

パイは顔がまた熱くなった。いつもなら、どうしていいかわからないけれど、今ならわかる。

パイは、満面の笑みで応えた。

シムリが帰ってしまった夕方、玄関の呼び鈴が鳴った。シムリが戻ってきたのだろうか。そう思ってドアを開けると、そこにはリンがいた。にっこりと笑っている。

「まあ、リン。もう夕方よ。早く帰りなさい」

「帰るよ。ぼく、ちょっとお礼を言いに来たんだから」

「お礼？」

リンの顔がこわばった。

「あの怖いねずみからぼくを助けてくれたお礼」

「パイは背筋が栗立つのを覚えた。あれは、夢ではなかったのか？」

「あいつはね、ぼくに言ったんだ。大人たちの裏切りのない、子供だけの世界に連れていくって。そこには苦しみなんてないし、ぼくは何でも思い通りにできるって」

「本当？」

「本当だよ」

パイの耳に、あのトランペットの音が聞こえてくる。それは耳の奥にからみつくようで、忘れたくても忘れられないものだった。

「でも、パイが呼んでくれたからぼくはわれに返った。そんな世界、ありえないって気づいた。だからあいつはテントを消して、ぼくみたいな子供をまた探しに行ったんだよ」

パイは呆然としていた。夢？ リンとパイは同じ夢を見ていたのか？ いや、この感覚は違う。本物だ。

「パイ、小説に書いてよ。お願いだ。子供たちを助けてよ」

パイはリンを見た。真剣な目。

「わかったわ。次の小説に書く。子供たちへの警告として、書くわ」
「ありがとう」

リンは笑った。パイはリンを抱きしめて、

「送って帰るわ。またあんなものに出会ったら大変だから」
と言った。リンは嬉しそうにうなずく。

「パイと二人きり、嬉しいな」

パイがあこの出来事を小説に書いて発表して間もなく、子供の誘拐魔は逮捕された。犯人は有名な天才手品師だという。催眠術も得意で、それによって子供たちに幻を見せ、捕まえ、遠くの鉱山に売っていた。その子供たちは皆助かったのだという。

犯人が捕まったのは、「小説で似た話を読んだから」怪しさに気づいた子供が警察に知らせたことが元だという。その小説がパイの小説だとは、誰も気づいていない。そう、リンとパイ以外は。

パイはほっとした思いで新聞を読んだ。そして、小説を書いていてよかったと、強く思った。

シムリにも教えようかしら。

そう思ったけれど、考え直した。

いいえ、こういうことは胸のうちにしておくべきだわ。

リンとパイだけの秘密。それで充分だ。

パイは新しい小説に取り掛かろうとした。引き出しの中の原稿をまとめて取り出そうとして、変な感覚に気づいた。何か固いものがある。

さぐって取り出すと、それはピンク色の封筒だった。

「何かしら？」

便箋を取り出す。開くと、見覚えのある字でこんなことが書いてあった。

『パイへ。本当は大好きです。愛しています。結婚してください。リン』

パイは微笑んだ。手紙をそっと元に戻して別の引き出しにしまう。これも、シムリには絶対に教えられないわ。

《了》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8750q/>

リンの手紙

2011年6月9日22時25分発行